



TITLE:

野猿公苑における生態系の保全と 野外博物館活動の研究(III 共同利用 研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

和泉, 剛; 鈴木, 久代; 岩井, 健二; 太田, 映司

CITATION:

和泉, 剛 ...[et al]. 野猿公苑における生態系の保全と野外博物館活動の研究(III 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1985, 15: 40-41

ISSUE DATE:

1985-10-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163568>

RIGHT:

熊本県における野生ニホンザル集団の生息調査 と猿害対策

藤井尚教（尚綱大・文）

昭和58・59年の2年間の調査で、野生ニホンザル集団の5分布地域を見い出した。その一つは阿蘇郡であり、他はすべて球磨郡である。

阿蘇郡では、阿蘇南外輪山の北斜面(旧火口壁)の原生林を中心に約50頭程の集団が3つ存在しているようである。冠ヶ岳から地蔵峠に分布する集団と、羅漢山から地震が岩、そして二子石から清水寺に分布する2集団で、後者の2集団は追跡観察することができた。ここの猿害はとうもろこし・栗・椎茸で、猿害対策としては駆除一本槍で全く成功していない。地元では餌付け話がでており、やめさせる説得を行っている。行政当局の問題意識が低く、非協力的で、有効な対策はうちえない状況である。

球磨郡においては、1.五木・相良・須恵・深田の4カ村、2.球磨村大槻、3.錦町西大平、4.水上村の4地域があげられるが、2と3は確実に生息しているが、4は諸々の資料から可能性が高い。

1の地域については、この60年2月に2日ばかりで、4カ村一斉に分布調査を行うことができた。その結果、五木村では土会平を中心に元井谷・高野・頭地に分布する土会平集団(約50頭)と、天狗岩を中心に掛迫から栗鶴・九折瀬に分布する天狗岩集団(約30頭)の2集団が存在する。五木村と相良村の村境には、藤田集団(約60頭)がいて、ダム工事との関連で、五木村への依存が強くなりつつある。相良村を南北に貫流する川辺川の西岸には深水・初神・六藤にかけて四浦西集団(約50頭)が、東岸には、北岳を中心に袴谷・大谷・晴山、そして須恵村の平山・松尾、深田村にかけての北岳集団(約50頭)がいる。川辺川兩岸の両集団は、やはりダム関連工事や大規模林道の工事の影響を受けて、南下傾向を示し、猿害地域が拡大している。この4カ村における椎茸・栗の被害は年間2千万円を越し、地域振興策との対立が生じ、行政当局や地元民の問題意識も高まり、一斉調査も可能となったのである。4カ村と県を含めた猿害対策協議会も設立され、威獣を中心とした対策と、人員の配置も行われようとしている。ともかく、住民を啓蒙し、住民及び行政と一体となって

対策を考える必要性を痛感している。

野猿公苑における生態系の保全と野外博物館活動の研究

和泉 剛(関西相互環境センター)・鈴木久代(岩田山自然遊園地)・岩井健二(元鴨沂高)・太田映司(柏野小)

ニホンザルの持続的利用によって、低木層であっても高木層であっても、樹種の単純化が生じる。これは、ニホンザルの持続的利用による圧迫・損傷等に対する耐性が樹種によって異なるためと考えられる。高木層にあっては常緑広葉樹(特にキンモクセイ)が耐性に優れ、低木層にあっては、ヤマツツジ・クサギが耐性に優れるものと考えられる。

ニホンザルの持続的利用による圧迫・損傷等が著しい場合には、高木層が枯死し、消失する。これを防ぐ必要を認める時は、餌場を数年おきに移すことによって、樹勢の回復を図る必要がある。

上記の高木層消失の後には、草地と耐性に優れた樹種による低木林が生じ、特に通行の頻繁な部位にあっては裸地が生じる。裸地の出現は冬期に特に著しい。裸地においては表土の崩壊や流亡が生じることがある。しかし、これは地形的に不安定な部位やニホンザルの利用が特に頻繁な部位に限られており、土木の技法及び植栽上の技法を検討することによって、十分対応し得るものと考えられる。

地表付近の小動物相においては、ニホンザルの持続的利用によって、糞虫や都市型の種が増加する。また、高木層の消失に伴って単純化が生じる。これらに対しては、植物環境の保全に加えて、餌場周辺の清掃の徹底によって、ある程度対応できるものと考えられる。

博物館活動においては、見せるための展示室が設置され、計画された行事に参加して教えてもらうということが一般化されている。

市街地に接し、自然環境に恵まれた嵐山自然公苑では、受動的なものから能動的なものへの転移を図る必要を痛感する。

一般的なものとは勿論、自然環境を生かした自主研究の場の設置、ヒントを与えるための問題メニ

ユー・解説資料の整備，教育機器の活用等により，来山者の多様化した中で，それぞれの目的に即したユニークな野外博物館活動を推進しつつあり，その効果を期待している。

猿害が生じる要因の分析 一木曽研究林の例一 田中 進（マカク研究会）

課 題 2

ニホンザルの群れの遊動時における群れ内の個体間関係

陸 齊（東京農工大・農）

(1) ニホンザルの群れの移動が群れ内のどのような個体間関係に支えられて起こるかを，集団移動時の個体の行動の観察，記録とその分析により明らかにすることを試みた。(2) 集団移動時のリーダーの有無及びリーダーシップをとる行動の再吟味を試みた結果，リーダーの存在を行動上の事実から直接立証することは不可能であることがわかった。さらに従来リーダー・フォロワー関係と見なされてきた先行・追隨の交渉は，すべて追隨側の追隨行動によって生じることがわかった。また優位のおとなオスの周囲にメスやこどもが多数集まる現象は群れ内の諸団体の緊張が高まるような状況下に限り，これは個体の他団体への影響の強弱一般の問題でありリーダーシップの問題ではない。日常の平静な状況下では群れ内の個体は分散し，おとなメス同士，おとなメスとこども，こども同士がまとまって相互に追隨しあいながら移動する。特に3,4歳オスは行動範囲が広く，おとなメスや他のこどもに追隨したり群れの周辺で集団の動きに追隨することがあるなどその時々状況に応じて移動のし方も多様であった。(3) 先行・追隨交渉の基本的パターンは，(a) 他個体が動き出すとそれに追隨する，(b) 通りすぎる他個体に追隨する，(c) 前後して交互に追隨しあう，の単純明瞭な3種類以外にはなく，これは群れ内のどの個体も関与するきわめて一般的な交渉であった。それが複雑多様な社会的場及び文脈上に展開する時に複雑で多様な様相を呈した。(4) 先行・追隨

に伴って他個体の動きを目で追う，辺りを見回す，遠くを注視するなどの周囲の他個体の動静に注意を向ける行動が観察された。(5) 他個体に追隨する行動傾向一般は群れの移動時に限らず遊動中の様々な交渉場面でみられ，異なる行動範疇に属する先行・追隨が集団移動のきっかけになることもあった。このことは集団移動の様子を明らかにするには他の異なる行動範疇に属する先行・追隨も集団移動時の先行・追隨に関わる諸行動と比較・検討をし統一的に理解する必要があることを示している。

志賀A₁，A₂，B₂，C群の戸籍簿作り

常田英士（地獄谷野猿公苑）

志賀高原の横湯川流域に生息するニホンザル4群のうち，今年度は主に，B₂群とC群の個体カードの作成を目的とした。

B₂群は近年食害を起こしており，食害防止のため，威かく，追い上げ作業を行っている。威かくの効果が出て来ただけ，サルは人を見ると逃げようになっている。本調査においても，猿害防止の方を優先させたので，数頭のオスの個体識別ができてだけで，以前から個体識別してあるオトナメスの存否や出産等については確認ができなかった。

C群については大部分の個体の個体カードを作成した。

かつて横湯川流域の各群にいたことのある個体識別されたオスについても個体カードを作成し，各オスがいつどの群れにいたか，記録整理した。

作成したカードは約400枚である。

課 題 3

ヤクニホンザルの自然群における食をめぐる群内競争の社会生態学的研究

丸橋珠樹・大井 徹（京大・霊長研）

昨年度の共同利用研究では，屋久島国割岳西斜面の照葉樹林に互いに遊動域を隣接して生息するアルク群と本山A群との間には，食物メニューや